加護なし令嬢は四人の精霊王と淫らな契約を結ぶ

～とろ甘えっちで溺愛されてしまいました～

全580頁

加護なし令嬢は四人の精霊王と淫らな契約を結ぶ
～とろ甘えっちで溺愛されてしまいました～

Contents

第一話　精霊に嫌われた令嬢エレン……3p
第二話　水の精霊王編～求めていたもの～……67p
第三話　水の精霊王編～戯れ～……155p
第四話　火の精霊王編～王からの招待状～……190p
第五話　火の精霊王編～嫉妬～……264p
第六話　森の精霊王編～再会と裏切り～……307p
第七話　森の精霊王編～狂酔～……386p
第八話　空の精霊王編～騒乱の中で～……427p
第九話　空の精霊王編～渇望～……523p
最終話　祝福の日に……558p

第一話　精霊に嫌われた令嬢エレン

朝日が瞼を刺激する。静かに目を開けた私は、ゆっくりと起き上がって身支度を始めた。

召使いが来ないまま身支度を終え、賑やかになってきた邸宅の中をひっそりと歩く。窓の外から照らす朝日はとても爽やかだけれど、気持ちはちっとも晴れやかにならない。

大した距離でもないのにやけに時間が掛かった。ようやく着いた食堂の扉を開けると、中で両親と妹が食事していた。私が中に入ると突き刺すような視線が一瞬私に向けられ、そしてすぐに戻る。

「……おはようございます」

いつもの通り返事は返ってこなかった。カラトリーと皿がぶつかる音がするだけだ。

私はそのまま静かに歩いて食堂の長いテーブルの端っこに座った。用意された自分の料理を見つめ、小さな溜息をついて席に着く。

――――今日も、スープの残りとパンとサラダだけ。

見もしなくても視界の隅に映る家族の華やかな朝食と比べてしまう。

スープは具なんてちっとも残っていない、最後の残骸をかき集めたようなものが申し訳程度に盛り付けられているだけで、一杯にも満たない。サラダは家族の残りだろう。みっともなく千切られた、小さな切れ端のようなものがほんの少し。パンだけは同じものだけど……。

これは家族の指示なのか。それとも使用人達が独断でやったことなのか。どちらか分からないが、どちらでも同じことだ。

いつからこんな扱いを受けるようになったのか。ここは一応伯爵家で、私は伯爵家の長女なのに。この冷遇が始まったのは、数年前の話。いや、もっともっと前だろうか。

モリス伯爵家の長女、エレン・ウィンダー・モリスとして生まれた私は、この世に生を受ける以前……正しく言うと、前世というものがあった。今いる世界とは別の世界で生き、高校三年の時に事故で亡くなるという短い生が。

前世の私は伯爵家などではない、日本という国のとある貧困家庭に生まれた。

両親は健在だったが親の稼ぎは悪く、父親は酒飲みであちこちに借金を作る暴力的な男。一方で母親はそんな父のストレスからか別の男に走り、邪魔な私に八つ当たりという名の躾を施した。要はネグレクトだ。

必然的に愛情不足。そして金銭的に落ちぶれていた私は、迷うことなく道徳から外れた道を歩んだ。

男の人はお金を得るための手段だったし、幸いある程度の見た目で若かったから、体を対価にすればいくらでも寄ってきた。そうして食事にありついていたし、ようやく人並みに生活できていた。別に悪いことだとも思わなかった。

だけど悪いことをしていればいつかは身を滅ぼす。雨の日の交差点で、私の命は呆気なく散った。

だけど不思議なことが起こった。目が覚めると、見たこともない場所にいた。それがこのモリス伯爵家だ。

どういうわけか私は赤ちゃんの姿になっていて、生まれたての状態。周りにはメイドの格好をした人達がたくさんいた。そして、私の「今世」の両親が。

信じ難いことだけど、私は転生というものをしてしまったらしい。そんなもの作り話の世界のことだと思っていたけれど、時が経てば経つほど、そうだと実感した。

過去の家庭よりも遥かに裕福なモリス伯爵家。そして私を可愛がる両親。親切な使用人達。

最初は信じられなかったけど、とても嬉しかった。きっと前世が酷かったから、神様が私にプレゼントをくれたのかもしれないと思った。モリス伯爵家での生活は何不自由なく、家族仲もいい。あの地獄のような前世とは雲泥の差だった。

私は幸福になった。やっと巡り会えた家族との幸せな日々に歓喜した。日々のことに感謝して、これからは過去の行いを改めようと思った。あの日までは――――。

この世界には創造神というものが存在する。そして創造神が創り出した四人の精霊王がいた。それらがこの世界を創り出した原初の存在と言われていた。

人々は創造神と精霊王を敬い、その恩恵を受けて暮らしている。私が暮らしているガルムンド王国もそうだ。

水の精霊、火の精霊、森の精霊、空の精霊。これらは四大精霊と呼ばれ、私達の生活になくてはならないもの。

人々は十歳になると自身を加護する精霊を選定される。これは人によってまちまちで、家族でも違う精霊になることもある。

精霊の加護を受けた人間はその恩恵として精霊の力を大なり小なり使うことが出来た。加護が大きければ大きな力を使えるし、その逆もある。

そして私は――――。

「お母様、あの『加護なし』は別の部屋で食事させたほうがいいと思いますわ」

そう冷たく言い放ったのは妹のリリアンだ。リリアンは血の繋がった妹だけれど、現在私との仲は最悪だった。

「……放っておきなさい」

「嫌だわ。あんなのが姉だなんて。一族の恥晒しよ。早くどこかでのたれ死んでくれればいいのに」

まるで汚いものを見るような母と嘲笑う妹。そしてそれを聞いても何も言わない父。三人は変わってしまった。幸せな家庭から一転、私はまたどん底に叩き落とされた。

――――そう。私なんて、きっとあのまま死んだ方がよかったんだ。一つの加護も受けられない。みんなに嫌われている娘なんて……。

母と妹は水の精霊の加護を受けている。父と火の精霊。だけど私は……どの精霊の加護も受けられなかった。

十歳になった時、精霊選定を受けた。その頃は家族との仲はまだ険悪ではなかった。
「エレン、あなたはどの精霊になるのかしら。楽しみね」
母の最後の笑顔を見たのはこの時だ。精霊選定は特別な行事ではあるけれど、子供達にとっては通過儀礼のようなもの。子供の晴れ姿を親は楽しみにしている。
「わたし、全部のせいれいとお友達になりたい」
「まぁ、それは無理よ。精霊は一人につき一人だけだもの」
精霊選定は精霊教会が行う。精霊教会は精霊を創り出した創造神、そして全ての精霊を敬う場所。精霊に関する多くのことは精霊教会が取り行っていた。
幼い私は司祭様に挨拶し、特別な宝玉を使って選定を受けた。宝玉の色によって精霊の加護が分かるというシンプルな道具だった。
水の精霊なら青、火の精霊なら赤、森の精霊なら緑、空の精霊なら白。私は宝玉の間で跪き祈りを捧げた。後ろでは母が興奮した表情で見守っていた。だけど。

祈りを捧げた瞬間、突如破裂音と共に宝玉が四方に飛び散った。丸い宝玉は見事に粉々に砕け、辺りに散乱する。

「な……！　なんだこれは……!?」

司祭様達も何が起こったか分からないようだった。十歳の私ももちろん、何が起こったか分からなかった。

「四大精霊の力が宿る宝玉が割れるなど……精霊様がお怒りなのだ！　この娘は精霊様の怒りを買っている！」

司祭様の推測によると、精霊が私を拒絶したためこのような反応になったのだろうということだった。精霊の加護を受けるどころか精霊に拒絶された私は、その後も災難が続いた。

司祭様の言葉を信じられなかった母が精霊の力が宿った魔道具を買って私に使わせようとするとその道具は壊れ、あの宝玉のようにバラバラに砕け散った。教会に何度も足

を運び、精霊に謝ろうとしたけれど、その度教会内でものが壊れたり司祭様に怪我を負わせた。

いよいよ私が本当に精霊に嫌われていると思い知った母は、私をどこへも連れて行かなくなり、屋敷の中へ閉じ込めた。家族の中での私の扱いは使用人以下となった。

当たり前だ。この世界は精霊が生命線。精霊の加護を受けられる人がほとんどだ。加護がないなんて……聞いたこともない。

モリス家の加護なし令嬢の話は社交界にも伝わっているのだろう。成人の年を迎えても、母は一度もその場所に私を連れて行かなかった。

当然だ。加護がない娘なんて、恥以外のなにものでもない。嫁の貰い手だってない。学校にも通えない。私はいつしかほとんど自分の部屋から出なくなっていた。

食事が済んだ私は早々に食堂を出た。使用人にも挨拶ひとつしてもらえず、家人としての扱いも受けられない。ドレスの裾がほつれていても、誰も治したりはしない。まるで、前世と同じだ。

――――精霊さん。私が嫌いなら、どうかいっそ殺してくれたらいいのに。

この日、朝起きて支度していると、珍しく部屋の扉が叩かれた。私の部屋に来る使用人は限られている。それこそ、差し迫った用事でなければ誰もこない。食事でさえ呼ばれないから自分で行くようにしているというのに。

扉を開けると使用人の女性が立っていた。

「エレン様、お出かけのお支度を」

「え……？」

「本日教会にて大精霊祭の催しが開かれます」

大精霊祭。数年に一度開かれるという式典だ。創造神と四大精霊に対する感謝を忘れないため、ガルムンド王国ではこの催しを盛大に行なっている。

精霊教会本部で行われる式典には王族と貴族しか招待されない。恐らく、一家総出で出席しなければならないのだろう。でなければ私に来いというはずがない。

だけど行けばきっと侮蔑の視線に晒されることになる。外に出ずとも私のことは知られているだろうから。

精霊に嫌われているのに精霊を讃える式典に参加するなんて滑稽だ。だが、だからといって私が拒絶するのは失礼にあたる。

「……分かりました。用意をします」

当然使用人が手伝ってくれることはなかった。私は持っているドレスの中からできるだけ綺麗なものを選んで着た。黄ばんでいるのか元々黄色いのか分からないドレス。リリアンのお下がりだ。

公式の場に着ていけそうなのはこれだけだった。古いデザインだが他はネズミなんかにやられていて着れそうにない。靴はサイズが小さくなっていて窮屈だが、ドレスに隠

れて見えないだろう。髪飾りは小さい頃に使っていた物をとってあるから、それを使うしかない。ボロを着ていくよりはマシなはずだ。

準備を終えて屋敷の玄関にいくと、既に家族は馬車に乗っているようだった。しかし馬車の扉を開けるなり、三人に忌々しそうな視線を向けられる。

「みっともない格好ね。平民でも今日はあなたより綺麗な格好をしてるわよ」

そういったリリアンは青いドレスを着ていた。裾がふんわりしていて、フリルがふんだんにあしらわれている。胸元には同じ青い宝石のネックレス。揺れる髪飾りも洒落ている。私と違って外に出かけているリリアンはドレスもたくさん買ってもらえる。

「いいこと？　この式典には国王陛下もいらっしゃるのだから、絶対に問題だけは起こさないでちょうだい。あなたを連れていくのは陛下のご命令で仕方なくなのだから」

「はい……」

私はリリアンの横に腰掛けた。リリアンはすごく嫌そうな顔をしている。

（……式典なんて中止になってしまえばいいのに）

私の薄暗い感情とは裏腹に街は明るく賑やかだった。大精霊祭りに合わせているのだろう。華やかに飾り付けられて、みんな楽しそうに喋っている。

貴族は式典でお祝いするが平民はああして大精霊祭を祝うのだろう。数年に一度の催しだからみんな楽しみにしていたのかもしれない。

あそこにいる人たちはみんな精霊の加護を受けている。私だけが異質な存在。そう思うとまた暗い気持ちになった。

教会に着くと他の貴族達が続々と馬車から降りているのが見えた。真っ白い建物の中に人々が吸い込まれていく。王国中の貴族が来ているわけだからかなりの人数だ。私は家族の後ろに隠れるように付いていった。

教会には来たことがある。それこそ、精霊選定の時に。そしてそれを覆そうとした時幾度も。そう思うと嫌な思い出ばかりだ。

「見て……モリス伯爵のところの……」

「ああ、あの方が加護なし？」

すぐ近くにいた婦人達は私を見て怪訝そうにひそひそと声を潜めた。何せ、加護がない人間などいない世界で一人だけ加護がないわけだから、噂はそこらじゅう、尾鰭をつけて広まっているのだろう。おかげで母の顔色は最悪だ。リリアンも私からかなり離れて歩いている。

（ここにいたって、どうせみんな嫌な顔をするだけだ。ああ、気分が悪い。なんだか吐きそう……）

つい私は立ち上がった。体がフラフラしている。もしかしたら人の多さにあてられたのかもしれない。

すぐさま、「どこにいくの」と、母が眉を釣り上げた。

「少し、気分が悪いので外で空気を吸ってきます」

「いいこと？　問題を起こさないちょうだいね。早く帰ってきなさい」

母もこの視線が嫌だったのか、私が抜けることに対して何も言わなかった。

私は人でごった返した礼拝堂から抜けて中庭に面した開放廊下へと出る。式典の準備をしているせいか人が全くいない。みんな礼拝堂の方に集まっているのだろう。

外に出たからか、少しだけ気分がスッキリしたような気がした。息を吸い込むと微かに冷たい空気が鼻腔から肺に入ってくる。

教会の敷地内にいても街の賑やかさが伝わってくる。今日はきっと一日中こうだろう。

精霊なんて、本当にいるのだろうか。私には見えないし感じることもできない。

ぼんやりと中庭の空を見上げていた時だった。ふと向こうの廊下から人が歩いてくるのが見えた。

いけない。式典に出席せずにこんなところで油を売ってるなんて思われたら……。

私はとっさに近くの部屋の扉を開けて身を隠した。近付いてきた足音は少し待つと通り過ぎていく。どうやらやり過ごせたらしい。

今更式典に戻ったところで、どうせ変な目で見られるだけだ。このままここにいたほうがいいだろうか。

「あれ……？」

ふと振り返る。どうやらここは普通の部屋ではなかったらしい。式典の会場と似たような作りだ。部屋の奥に真っ白な祭壇があった。祭壇には大きな人の姿の像が置かれている。

なんの像だろうか。近付いて足元を覗き込むと土台に金のプレートがついていて、文字が掘られている。

「テレ、シア……これ、創造神の像なんだ」

創造神テレシア。この世界を創り出した女神様。真っ白な大理石で造られた像は髪の長い、女性らしい姿に象られている。その首元には大粒の美しい宝石がついた首飾りが掛けられていた。宝石は青、赤、緑、白とカラフルだ。おそらく四大精霊を表したものだろう。

なんて綺麗な首飾りだろうか。あんな首飾り、きっと王妃様でも持っていない。
宝石は天窓から降り注ぐ光を浴びて美しく輝いている。あんな場所に飾られているなんて、きっととても大事なものに違いない。
「綺麗……」
『――――テレシア……？　そこにいるのは……テレシアなのかい？』
突然声が聞こえた。咄嗟に私は身を隠そうと近くの椅子に屈み込んだ。だけど、部屋の中には私しかいないようだった。
（あれ……？　確かに声が聞こえたのに……気のせいだったの？）
立ち上がり、女神の像を見る。声は象の方から聞こえた。しかし石像が喋るはずがない。
けれど次の瞬間、祭壇から眩い光が放たれた。あたりを真っ白に覆い尽くすほどの光に視界が覆われてしまう。あまりの眩しさに目を瞑った。

やがて、周りを確かめるようにゆっくりと瞼を開く。そこにあったのは、驚くような光景だった。

「え……っ」

宙にふよふよと浮かんでいるのは先ほど綺麗だと眺めていたネックレス。燦々と輝くネックレスは、私の目前に浮かんでいた。

『ああ……！　やっぱりテレシアだ！　テレシア！　僕だよ！　覚えているかい!?』

「な、え……っどうして、ネックレスから声が……!?」

それはおかしな光景だった。ネックレスから青い光が溢れ、そこから声が聞こえるのだ。光は声に反応して。まるで水面のように波打っている。

『僕だよ、テレシア……忘れてしまったのかい？　ああ、そうだ……君は力を使い果たしているから、きっと記憶がないんだね……ごめんよ。僕らのせいで君をこんな目に遭わせてしまって……』

青い光から悲しそうな声が聞こえてくる。声は男性……のようだ。それに僕と言っているからそうだろう。でもネックレスはしゃべったりしない。

この世界は四大精霊が支配している。正確に言えば、その力が。人間達は精霊の力を借りて生活している。だからもしかしたら、このネックレスも誰かの力で動いているのかもしれない。

（だけど、変だ。テレシア……って、創造神のことだもの。このネックレス、どうしてこんなことを……）

その時、私の頭には単純に疑問も浮かんだが、厄介なことに関わってまた問題を起こして母達に怒られることの方が先に浮かんだ。

このネックレスは見るからに高価そうなもの。しかもここは精霊教会本部で、勝手に入っていい部屋じゃなさそうだ。

思い立った瞬間、私は身を翻した。逃げるように一目散に外へと向かう。

『ああっ！　テレシア……っ待って！』

「す、すみませんでした……っ」

部屋から飛び出し礼拝堂へと戻る。幸い、司祭様の話はまだ始まっていないようだった。荒い息を押し殺しながら、母の隣へ座った。そして、さっき見た奇妙な光景を思い出す。

あのネックレスはなんだったのだろう。見るからに高価そうだったし、創造神の像の前に置いてあるということはきっと大事なものだ。誰かの力が宿っている？　あの光は青い色をしていたから、きっと水の精霊で――――。

あれこれ想像している間に司祭様の話が始まった。やがて教会の司祭様達がゾロゾロと祭壇に上がっていった。だけどその様子は、なんだか慌ただしくて奇妙な雰囲気を醸し出していた。

司祭様の表情が険しい。何かあったのだろうか。　同じことを思っているらしい。近くに座っていた貴婦人がこそこそと喋る。

「何かあったのかしら」

「それが……さっき別の司祭様かつぶやかれていたんだが、このあとお披露目する予定だった聖物がなくなったらしい」
「ええっ」
「こんな神聖な日に……一体どういうことなんだ」
時間が経てば経つほど会場のざわつきはひどくなっていく。しばらく待っていると、突如司祭様が物々しい様子で声を上げた。
「皆様……申し訳ありません。この後執り行う予定は火急の事態により延期となりました。つきましては急遽予定を繰り上げ、本日はこれにて終了させて頂きます」
司祭様の声に会場のざわつきが増す。火急の事態。何かとんでもないことが起こったことは明白だった。会場に訪れた貴族達は半ば強制的に教会から追い出された。
国の一大イベントがこうして潰れたのは、何か理由があったのだろう。だが間が悪い。よりによって私が参加した日にこんなことが起これば……家族の視線は私へと向けられた。

「ねえ、あんたが何かしたんじゃないの？」
屋敷に着くなり、妹のリリアンが口を開いた。ほら、やっぱり……と思わず溢れそうになったため息を喉に押し込む。
「……違う。私は何もしてない」
「じゃあなんで突然中止になったの？　聞けば、祭典で使う予定のネックレスがなくなったそうじゃない。あんたがまた壊したんじゃないの？」
――――ネックレス？　もしかして、それって……。
頭の中で思い出すのはあの部屋で見つけた美しいネックレス。石像の首元にかけられたネックレスは、どう見ても高価そうなもの。きっとあれがなくなった聖物だったのだ。
だが、私は壊したりなんかしていない。一度だって触れていない。だから私には関係ないはずだ。
「違う……私じゃない」

「案外、あんたが盗んだんじゃないの？　あんたは精霊に嫌われてる。だから聖物を使って精霊を操ろうとした。違う？」
「違う！　私はそんなこと……っ」
「じゃあ身の潔白を証明してみなさいよ」
リリアンは私を嫌っている。年頃の女の子。精霊に嫌われたみっともない姉の存在は彼女にとって厄介そのものなのだろう。だからこうしてしょっちゅう絡んでくる。
だけど私だって黙ってばかりじゃない。身に覚えのないことは否定しなければ。
「……分かった。私は何もしてないんだから……」
ポケットに手を入れる。出掛けることはほとんどないからハンカチ一つ入っていないポケットは空洞のはずだった。だけど私が手を入れた瞬間、何か硬いものが擦れるような音がした。恐る恐るそれをポケットから引っ張り出す。
「えっ……!?」

そこにあったのはあの時教会で見たネックレスだった。それを見て驚愕したのは私だけじゃない。

「ほらっ、見なさい！　やっぱりあんたが盗んだのねっ！　なんて卑しい女なの！」

「ちが……っ違う！　これは私が入れたんじゃ……っ」

「しらじらしいっ！　あんたが盗んだんでしょう⁉　お父様とお母様に言いつけてやるわ！」

リリアンが小走りで駆けていく。彼女が大声で両親を呼び付けているのが聞こえた。

その時、私は絶望した。

――――ああ、終わった。

◇◇◇

聖物のネックレスが見つかった。しかも私のポケットから。

このことを知った両親は私を滅茶苦茶になじり、ありとあらゆる罵倒を浴びせた。平手打ちも何度も食らった。

精霊教会の聖物を盗む。これがどれだけ重い罪になるか、分かっているからだ。

よりよって私がその罪を犯したことで両親は激昂し、私を痛めつけたあと暗い倉庫に閉じ込めた。当然私は弁解したけど、現実ポケットから出てきたあとで信じてもらえるわけがなかった。

精霊を信仰するこの国にとって、あのネックレスはお金に換えるとかそういう価値のものではない。両親はあのネックレスを教会に返すのだろう。そしてその後私は……きっと殺される。

結局前と変わらない短い命。感じた幸福も一瞬だった。

「出ろ。伯爵様がお呼びだ」

もはや敬語すら使われなくなった。伯爵家の警備を担当していた騎士が倉庫に現れたのはそれから次の日のことだった。

手錠も何もされなかったけれど、それはきっと私が精霊の加護を受けていないからだろう。精霊の加護がない私はこの状況でどうすることもできないと踏んでのこと。加護なしとはそれほど無力な存在だ。

ついて行った先は応接室だった。中に入ると、精霊教会……司祭様の格好をした人が三人もいた。それに、父と母。それにリリアン。

全員の厳しい視線が私に向けられる。

「この……ッ図が高いぞ！　頭を下げろ！」

「うっ……」

私は父に無理やり頭を下げられる形で床に膝をついた。いくら貴族とはいえ、この国では精霊教会の人間の方が立場が上。加えて娘がネックレスを盗んだ負い目で、父は今とても気が立っている。

「エレン・ウィンダー・モリス。今からあなたの尋問を始めます。決して嘘はつかないように」

司祭様は両親よりは幾分かマシな目つきだったけれど、それでも厳しい目であることには変わりない。尋問と言いながらも、私のことは一つも信用していないように見えた。

「あなたはあの日、大精霊祭に参加した。そして別の場所に安置してあったあのネックレスを盗んだ。違いますか？」

「違います……！　ネックレスが置いてあったのは見ましたが……盗んでなんかいません！　知らない間にポケットの中に入っていたんです！」

「……そんな言い訳が通用するとでも思うのですか。ネックレスが勝手に動いたとでも？　あのネックレスは創造神が所持していたとされる聖物の中でも特別なもの。普段は教会の奥深くに祀られているのです。あの日はたまたま外に持ち出されていましたが、ネックレスには特別な結界が貼られていて一部の人間以外あそこから持ち出すこと

などできないのです。それを持ち出したということは、何かしたはずです。勝手にポケットに入るようなものではないのですよ」

「そんな……本当です！　私そんなことしていません！」

「あんた、祭典が始まる前に、気分が悪いとか言って抜け出したじゃない。その時に盗んだんじゃないの？」

リリアンの追撃が加わり、益々劣勢になる。

確かに、私の行動はどう見てもネックレスを盗むために動いたようにしか見えない。明らかに犯人だ。根拠がなければ誰も私の無実を否定してくれない。

「エレン嬢。事は重大です。あなたが持ち出したのはその辺りにあるような宝石ではないのです。創造神のネックレスは四大精霊の力が宿る、この国にとっては宝のようなもの。真実を話さなければどうなるか分かりませんか」

司祭様がチラリと両親の方を見る。それはモリス家お取り潰しの合図だったのか……なんにしろ、被害は私だけに止まらないということ。

それに臆した両親は、目をキッと釣り上げて私を糾弾した。
「お前……っ本当のことを話せ！　精霊の力が欲しくてあのネックレスを盗んだんだろう⁉」
「そうよ！　いつまでもそんな分かりきった嘘をついて……っここまで育ててやった恩を忘れたの⁉」
――――アンタなんて産むんじゃなかったわ。世話ばっかり焼ける金食い虫。
ああ、ここでも同じなんだ。やっと家族に巡り会えたなんて、妄想だったんだ。
私はきっとここで殺される。その後はどうなるんだろう。また転生するんだろうか。だけどこんな生き方しかできないならもう生まれ変わりたくなんてない。
「おいっ、なんとか言え！」
父の張り手が私の頬に飛ぶ。私は少し後方に飛ばされ、絨毯の上に転がった。
単純に娘を叱るための暴力じゃない。明らかに憎悪が滲み出ていた。痛いからか、それとも絶望したからか。目尻から涙が滲む。

『――――黙って聞いていれば……勝手なことをペラペラと。よくも君たち、僕の大切な人にそんな真似をしてくれたね？』

不意に声が聞こえた。それはこの場にいる誰の声でもなかった。透き通るような涼やかな声は大した声量もないのに部屋に反響する。

（この声……どこかで聞いたような気がする）

全員がその声に耳を傾けた。その瞬間、空中が歪んだ。ぐにゃりと歪んだその場所は人の形に浮かび上がり、やがてはっきりとその姿を形成する。

そこに現れたものに全員が息を呑んだ。青色の美しい髪色は現実にはないもので、白い装束を着ている。涼やかな美貌は一見女性に見えたが、よくよく見れば男性らしい体つきをしていた。人の姿をしている。けれど人間ではないと思わせるほど神秘的な容姿。

なんて綺麗なんだろう。そう思った刹那。父の声があたりに響いた。

「だ……誰だお前は！　勝手に屋敷に入ってきて……っ出ていけ！　ここを誰の屋敷だと思って――――」

「うるさいよ」

男が小さく口を開いた瞬間、父の体がふわりと浮いたと思ったら勢いよく壁に叩きつけられる。そして父の全身を覆うように、どこからともなく沸いた水が塊がとなって閉じ込めた。

ごぼっ……と水の中で父がもがく。水の中に閉じ込められて息ができないようだった。母とリリアンは突然の事態に狼狽え、水を囲みながらあたふたする。すると、男が司祭様の方を向いた。

「司祭、君は水の上級精霊の加護を受けているね？　なら……僕がどういう存在か、分かるじゃないかい」

男性が尋ねると司祭は驚愕の表情のまま数秒黙った。けれどもすぐに顔を真っ青にして、ワナワナと体を震わせる。

「あ、ああ……そんな、まさか……！　あなた様は……っ!?」
誰もが事態を飲み込めていない中、司祭様だけが男の正体を知っているようだった。
わからないが、この男が水の精霊を使う存在だということは分かる。けれどこんな何もない場所でこれほどの水を作り出せるのは普通の人間にはできない。
すると、司祭様は唐突に頭を下げた。それもものすごい勢いで、床に頭が擦りつくほどの低さで。他の司祭様もそれを見て同じように慌てて頭を下げる。
「み、……っ水の精霊王、カイル様！　初めてお目にかかります……！」
「え……っ!?」
水の精霊王――――。司祭様の言葉に私は目を見開いた。
精霊王は四人いる。水の精霊王、カイル。そして火の精霊王、フレイ。森の精霊王、リヒタ。空の精霊王ヴァン。
いずれもお目にかかることなど到底ない、架空に近い存在。

司祭様が驚くのも無理はなかった。精霊を敬う立場とはいえ、司祭様も……いや、この世にいる誰一人として、精霊王に会ったことなどないだろうから。

通常の精霊と違い、精霊王は使役できるような存在ではない。それでも、目の前のこの男が精霊王ならば、水の上級精霊と契約している司祭様は分かるのかもしれない。

「君達、仮にも司祭だろう？　それなのに彼女をあんなふうにして……僕を怒らせたいの？」

「で、ですがカイル様……っあの者は、創造神のネックレスを盗んだのです。我々はその追求をしていただけで……」

「ああ、そう。君の目は節穴なんだね」

冷え切った声が空気を切り裂いたようだった。司祭様はすぐさま「申し訳ございません！」と声を震わせ、頭を下げる。

「まったく……こんなことになるんだったらもっと早く手を出しておくべきだった」

『カイル様』と呼ばれた男が私に手を差し伸べた。その手は冷たかったが、どこか暖かさも感じた。

（なんだろう。この懐かしい感じ……。とてつもない存在のはずなのに、怖くない。私の味方をしてくれたから……？）

「せ、精霊王さま……っどうか夫を助けてください！」

しかし母とリリアンは慌てふためいた。水の塊の中にいたままの父の顔色がさっきよりも青くなっている。苦しそうにもがき、息が途切れ、もう呼吸が出来ないようだった。けれど先程の優しさとは一転して、カイル様は煩わしそうな視線を向ける。

「どうしてだい？」

「え……!?　そんな、夫が死んでしまいます！　お願いでございますから……っ」

「人間風情が僕に命令するな。その男は僕の大切な人を傷付けたんだ。溺死するぐらいで喚くんじゃないよ。それとも、君も死にたいの？」

母とリリアンが小さく悲鳴を上げた。父と同じくらい顔面蒼白だ。母とリリアンは水の精霊の加護を受けている、司祭様ほどではないが、きっと何か感じているはずだ。

表情だけじゃない。カイル様から怒りを感じる。だけど彼はなぜこんなにも怒っているんだろうか。大切な人を傷付けたって……まさか、私……？

私が見つめると、カイル様は私の方を見つめてにっこり微笑んだ。

「これ以上僕を怒らせたら、この領地ごと湖にするよ」

「あ、あの……カイル様、どうか父を……殺さないでください……」

だけど私が止めると、また一転、怪訝な表情を浮かべる。その瞬間、心臓が掴まれたようにヒュッと縮んだ。

「どうして？　あの男は君に暴力を振るったんだよ？」

「殺すのは……よくない、です。お願い、します……」

正直怖かった。けれどこのまま放っておいたら本当に父が溺死してしまう。私を殴ったり冷遇した人ではあるが、だからといって死んでほしいとまでは思っていない。

「……仕方ないね」
カイル様は渋々納得したように指を振った。すると、父を覆っていた水の塊がバシャンと音を立てて床に広がる。ゴホゴホ咳き込んだ父を母とリリアンが取り囲んだ。
「いいかい、人間。今日はたまたま許してあげたけど、次は容赦しないよ。……これでいいかい？」
またにっこりと笑みを浮かべ、純真無垢な少年のように私を見つめてくる。全くもって彼が分からない。
精霊王としての力は強大で、人を殺すのに躊躇いもない残虐さを持っているのに、かと思えばこうして私に微笑んだりもする。一体どういうことなんだろう。
「怪我をしているね。かわいそうに……痛かっただろう」
カイル様が殴られた私の頬に触れた。すると、瞬く間に痛みが引いていく。また、カイル様が微笑んだ。
「司祭、彼女を保護するんだ。こんなところにはとてもじゃないが置いておけない」

「え、え……つですが、その娘は……」
反論しようとした司祭様をカイルが睨みつける。
「しょ、承知いたしました……」
半ば強制的に司祭様を従えると、その後私は呆然とするままカイル様、そして司祭様達と共に屋敷を出た。
ネックレスの件は何一つ解決していないのに、私の身柄は精霊教会預かりとなり、先日訪れた精霊教会本部に連れて行かれた。
そして教会に連れて来られて数時間。私は個室で待つように言われた。
(どうしよう。ネックレスのこと……まだ疑われてるのかな)
理由は定かではないが水の精霊王、カイル様が味方をしてくれた。でも、だからといって楽観視は出来ない。
そもそも私は生まれてから一度も精霊の加護を受けられず、精霊教会からも異端視されていた。加えてネックレスが盗まれれば、疑われても仕方がない。

不安に思いながら待っていると、ふと部屋の扉が開いた。現れたのは年老いた男性の司祭様だった。他の人たちに比べ随分年を取っている。長髪の白髪が印象的な男性だ。

「あ、あの……」

「やぁ、気分はどうだい？」

その男性の後ろからひょっこり現れたのはカイル様だ。カイル様はまるで友達のように親しげな笑顔を浮かべると、

「顔色が悪いね。もしかしてどこか具合が悪い？」などと矢継ぎ早に尋ねた。

「大丈夫、です……。先ほどはありがとうございました」

「良かった。顔の傷も良くなったね。また痛むようなら言って。すぐに治すから」

カイル様はニコニコしている。だけどその少し後方で佇んでいる老齢の司祭様はやけに表情が曇っていた。何か言いたげな様子だ。

「あの……」

「初めてお目にかかります。精霊教会の最高司祭を務めております、アルマンドと申します……」

「え……っ」

最高司祭。それは精霊教会の最高権力者のことだ。教会の全てを取り仕切る実力者。当然、私と違って精霊の力を使うこともできる。そして数多いる司祭の中でも最も力が強い者がその座に着くことができると言われていた。屋敷の中に引きこもっている私でも知っていることだ。

まさか突然最高司祭様が訪ねてくるとは思わず、慌てて頭を下げた。きっと……いや、絶対にネックレスのことで来たに違いない。

「あの、ネックレスの件ですが……っ」

「その件ですが……エレン様。全て精霊王様から伺いました……誠に、誠に申し訳ございませんでした……」

突然アルマンド様が土下座する勢いで頭を下げた。

「えっ、え……!?」
「アルマンド。あとは僕から話すよ。二人で話したいから、下がってくれないか」
カイル様が強めに言うと、アルマンド様は深く頭を下げて入ってきたばかりの扉を出ていった。
ぽかんとしている私にカイル様はニコニコ笑う。かと思えば――――。
「ああ……！　やっと会えた！　ずっと君に会えるのを待っていたんだよ！」
大きく腕を開くとガバッと私の体を抱き締めた。
「え、えっ!?」
「君が消滅してから幾星霜……辛い日々だったよ。いっそ僕なんて生まれて来なければと何度も思ったんだ。テレシア……いや、今の君の名前はエレンだったね。こんなことになるまで助けられなくてごめんよ。君の気配を感じたのがついこの間だったから……」

まただ。私のことテレシアって……。それは創造神の名前なのに。どうしてカイル様は私のことをそう呼ぶんだろう。

「あの……カイル様。なぜ私の……」

「カイルでいいよ。様なんてつける必要はない」

「でも、カイル様は精霊王様なんですよね……？　呼び捨てなんて、そんなことはできません」

「僕を生み出したのは君だ。正確に言うと、テレシアだけど、君は彼女の生まれ変わりだから同じだね」

「え……」

――――私が、テレシア様の生まれ変わり？

伝えられた事実に唖然とした。だけどすぐに否定する。

「あ、あの……私がテレシア様の生まれ変わりなんて、人違いなのでは……」

「いいや、間違いないよ。テレシアの力を分け与えられた僕が言うんだから間違いない」

創造神の生まれ変わり。そんなことがあるのだろうか。カイル様の話はあまりに非現実的だった。

「でも……私、精霊に嫌われているんです。姿だって、今まで一度も見たことがない。転生してここに来たのは違いありませんけど、創造神の生まれ変わりだなんて……」

「ちょっとごめんよ」

カイル様がコツン、と私の額に自身の額をくっつける。

「……うん。君は前の人生で早くに亡くなってしまったんだね。そうか……」

「あの……どういうことですか……？」

「テレシアの魂はまず最初に君の前世にあたる場所に転生した。だけどそこで亡くなって、こっちに転生したみたいだ。彼女の魂はとても大きいからね。肉体が消えてもどこかでまた生まれ変わるのさ」

つまり、創造神はなぜか消滅したあと、前世の私となった。そして前世の私が死に、魂はさらに生まれ変わって現在の私となった。

分かりやすいけど、理屈では説明できないような超常現象だ。

「でも、創造神が消滅したって……創造神は神様じゃないんですか？」

「……彼女は、僕ら四大精霊を創り出したことで多大な力を使った。そのあとなんとか存在を保っていたんだけど、姿を維持することが難しくなって……消えてしまったんだ」

「初めて聞きました……」

「創造神が消滅したのは人間がこの世に生まれるずっと前のことだから知らないのも無理はないよ。それに知っていたとしても教会は創造神と四大精霊を尊んでいる。消滅したとは言えないだろう。信仰に関わることだからね」

「でも……その、私が創造神の生まれ代わりだなんて。やっぱり信じられません。私は……どの精霊の加護も受けられなかったんです。精霊に嫌われているって、そう言われました。選定の宝玉を壊したことだってあるんです」

「それは違うよ。そんなわけがない」

カイル様はすぐに否定した。だけど精霊選定で否定され、その後何度も同じようなことがあった。今はなぜかカイル様とお話しできているけれど、私は本来精霊と会話も……姿を見ることもできない。

「人間界で行う精霊選定の儀は特別な道具を使うだろう？　あれは本人の属性を判定するものだ。素質があればそのように現れる。でも、君は僕たち四大精霊を作り出した特別な存在だ。人間界の道具ごときで判断することは到底できないよ」

「でも……！　みんな、年頃になったら精霊と話せるようになったり、力が使えるようになるのに、私はそれもできないんです」

「当然さ。君の力は僕たち四大精霊が吸い取ってしまったんだから。尊い君はこの世界を守ろうと僕らを作り出した。だけどそのせいで君の力はゼロになった。属性を判断することなんてできるわけがない。今も、君からはなんの力も感じられない」

半分は納得した。だけどまだ、自分がそんな大それた存在だとは思えない。私は前世も今世においても平凡な人間だ。特別何か秀でたところはなかった。

「でも、カイルさ――――」

「カイル」

笑顔の圧力に押されてしまう。カイル様……いや、カイルは、どうやら私を特別視しているようだ。

「……カイル。あの……どうして、突然現れたんですか……？　今まで喋ったことも会ったこともないのに」

「僕ら四大精霊の意識はネックレスと共にあった。君が生まれ変わることが分かっていたから、僕たちは君が出現するその日を待つことにしたんだ。君がもし本当に生まれ変

わったら、必ずネックレスに引き合わせられるはずだから。案の定君はあの日に現れた。それはもう言葉にできないぐらい嬉しかったよ。僕ら精霊には時の流れは遅すぎる。待ちくたびれてほとんど無意識の中にいたぐらいだ」

「じゃあ、あの時聞こえた声は……カイルだったんですか？」

「そう。僕が真っ先に起きた。だけど君は驚いて離れてしまったから、慌ててネックレスごと引っ張ってついて行ったんだ。だけどそのせいで君を泥棒呼ばわりさせてしまって……本当にごめんよ」

――――ずっと私のこと見えていたなら早く助けてくれればよかったのに。

なんて、ひどい言い草だ。助けてくれたことは本当に感謝している。だけど意識があったのなら、せめて私がリリアンに罵倒された時とか、閉じ込められた時とか、もっと早く助けられたんじゃないだろうか。まぁ、いきなり知らない人に助けられるのも変な気分だし、見ず知らずの精霊に期待するのもどうかと思うが……。

「本当は、精霊王は基本的に地上に直接干渉してはいけないんだ。与える影響が大きすぎるからね。って、テレシア――――以前の君に言われていたんだけど、忘れちゃったよね……」

「ごめんなさい……。昔のことは、その……覚えていないんです。前世のことは覚えているんですけど……。でも、ありがとうございます。あなたのおかげで助かりました」

「いいんだ。君のためだから」

「……カイルは、創造神のことがとても好きなんですね。なんだか、そんなふうに見えます」

「みたいじゃない。僕にとってテレシアは生みの親であり伴侶なんだ」

「伴侶って……もしかして、恋人同士だったんですか？」

「い、いや……そんな。テレシアと僕はソウルメイトというか、その、パートナーというか……人間がいう恋人のような関係じゃないんだけど……あ、でも僕はもちろん彼女が大好きなんだけどね」

カイルは頬を赤らめながら照れている。
どうやら、二人はそういう関係じゃないらしい。だけどカイルは少なからず、ただの生みの親以上の強い感情を持っているみたいだ。
「エレン」
カイルはにっこり笑うと、服の内側から何か取り出した。それを私に差し出す。それをみて思わずギョッとした。
「これ……っ創造神のネックレス……！　どうしてこれをあなたが……っ」
「君が持つべきだ。元は君の持ち物だったんだから」
「だ、ダメです！　返さないと……っまた疑われちゃいます！」
「構わない。アルマンドにも断った。これは君に戻すと伝えた」
そんなバカな。創造神の聖物なんて国の宝……ほいそれを他人に、しかもこんなただの人間に贈られるものではない。何十年、何百年と精霊教会が保管してきたものだろうに。

「司祭様にはなんて言ったんですか。私は疑われていたんです。普通にもらえるわけが――――」

「ああ。君がテレシアの生まれ変わりだと説明したよ。そうしたら快くくれた」

「は……え？」

カイル様は一体何を言ったんだろう。なんだかおかしな発言が聞こえた気がするけれど。聞き間違い。いや、幻聴？

「なっ、なんてことを……！　そんなこと言ったら大騒ぎになっちゃいます！」

「だって、僕は人間達に君を敬って欲しいから。この世界を作ったのは君なのに、その君が人間に蔑まれているなんて耐えられないよ」

「そんなの、きっと信じてもらえません……。私は普通の人間なのに。仮にカイルの言うとおり、創造神の生まれ変わりだったとしても……精霊の力は使えない。役立たずなのに。それにそんな肩書きがあったって……」

「それは心配いらないよ。僕らの力は全て君のものだ。君が望むなら……いや、僕はそのつもりで今まで待っていた。安心して。僕らは全て証明できる」

「僕ら？」

カイルは黙ったまま私の首にネックレスをかけた

眩い光を放つネックレスはじんわりと温かいように思えた。

――――あれ……何か、声が聞こえる？

そう思った瞬間。ネックレスから放射状に光が伸びた。突然のことに目を瞑ったのも束の間、大きな声が聞こえてくる。

「カイルこのクソ野郎！　お前よくも俺たちを閉じ込めやがったな!?」

え？　と思いながら瞼を開く。そこにはカイル以外に、もう三人男性が立っていた。

燃えるような赤い長髪の男性。そしてモノクルを掛けた理知的な表情をした新緑のような鮮やかな緑色の髪の男性。もう一人はエルフを思わせる真っ白な髪を後ろで三つ編みに結わえている男性。いずれも人間離れした美しさだ。

当然、三人とも知らない男性だ。だけど私にはこの三人が誰だか、なんとなく分かった。

「なんのことだい？　知らないね」

「しら切るんじゃねえっ！　一人でしゃしゃり出て一人だけテレシアと会いやがって！」

「ほら、君はせっかちですぐキレるだろう？　人間達といきなり接しても問題を起こすだけだ。それと、彼女はもうテレシアじゃない。エレンだ。君は今まで何を聞いていたんだい？　それとも僕が外に出ている間もまだ寝てたのかい？」

「コンのぉ……っ」

「まぁまぁ、もういいではありませんか。彼女を助けられたのですから」

「カイルの言うことは一理ある。フレイはすぐキレるから問題が悪化すると思ったのだろう」

「お前らまでカイルの味方かよ！」

――――四大精霊。この世界の人々が崇める存在。それは物語の中のように架空の存在で、軽々しく口にできないような圧倒的な力を持っている。

だけど、目の前にいる彼らはなんだか思っていたものと違う。四大精霊についてはそれぞれが持つ力や成り立ちを学んだが、彼らの性格なんて知らなかった。だけど想像よりはずっと親しみやすそうだ。

「あの……あなた達が、もしかして……」

四人の首がグルンとこちらへ向く。真剣な表情に圧倒されそうになると、三人はまるで泣きそうな顔をしながら私の前に来て膝を折った。

「ああ……テレシア――――じゃねぇ、エレン。ようやく会えたな」

「我々はあなた様がお戻りになるのをずっと心待ちにしていたのです」

「挨拶が遅くなってすまない。誰が先に出るかと言い合いになって、うっかりカイルに先を越されてしまったのだ。けして忘れたわけではない」

「は、はぁ……」

――――な、なんなのこの美男達は……なんで私なんかにかしずいてるの？

四大精霊は創造神が生み出した存在。だからだろうか。それにしては四人の眼差しはなんだか異様――――。カイルもだが、敬うというよりもまるで恋をしているような。

「やめなよ。むさ苦しい男ばかりで驚いてるじゃないか」

「お前も男だろ！」

「カイル、彼女を救ってくれたことは礼を言おう。だがいくらテレシアの気配を感じたからといって、単独行動をするのはよくないのではないか。彼女のことならば我々全員で解決すべきだ」

「そうですよ。フレイがキレやすいのは認めますが、君も少々突っ走るところがあります。この世界において彼女は人間なのです。後先考えず動けば彼女の立場が悪くなる」

緑色と白色の二人に嗜められるとカイルはやや膨れたような表情をした。とりあえず……なんとなくこの四人の性格が分かったような気がする。

「あの……お三方は……？」

本当は知っている。四大精霊だ。この世界の人間なら誰でも知っている。だけどあえて尋ねた。

「そうか……もう俺らのこと、覚えてねえんだな」

「仕方ありませんよ。肉体が消滅してしまったのだから。エレン……紹介します。私は森の精霊王リヒタ。そしてこちらが火の精霊王フレイ。そして空の精霊王ヴァン。カイルの紹介は必要ありませんね？」

「は、はい。あの、本当に、本物の精霊王様……なんですよね」

「勿論だ。だが通常はこうして姿を見せることはない。我々が具現化するためには大きな力が必要となる。我々は今までそのネックレスの中に意識を置いていた。お前に会えるのを待っていたんだ」

「エレン、安心してください。我々はあなたから産まれた存在です。これまでの人間達のようにあなたを傷つけることは絶対にありません」

リヒタは安心させるように柔らかい笑みを浮かべた。

彼のいう通り、少なくとも彼らは私に危害を加える存在じゃないみたいだ。私が創造神の生まれ変わりかどうかはまだ確信できないが、普通の人間にここまでへりくだることもないだろう。

「そうだ。これからは俺達がお前を守る。以前のようにむざむざと失ったりはしない。そうだ、何か困っていることはないか？　俺たちが力になろう」

「え？　えと……この状況に困っているというか、心配というか……私が創造神だって、司祭様達が知ってしまっているから、その……外は大騒ぎなんじゃないかと……」

「ん？　ああ……そうかもしれんな」

「大丈夫だよ。ネックレスの件は僕が説明したし、司祭も馬鹿じゃない。力の差ぐらい分かるはずさ」

――――駄目だ。この精霊王達、世情が分かってない。

精霊の力が感じられない私には分からないが、それでも一目見ただけでカイルの力は人間離れしていると分かった。

彼が精霊王であることは恐らくその力を目の当たりした司祭達もよくよく理解しているはずだ。

だが、突然現れた創造神の生まれ変わり（私）に、精霊王×4。今教会本部は大パニックになっているに違いない。

カイルは私の保護を申し出たらしいが、このことが公になれば私は勿論、彼らもどのような扱いになるか。

邪険にされることはないかもしれないが、これはかなりイレギュラーで、ありえないこと。このまま何もせずここで過ごすというわけにもいかないだろう。

「……やっぱり信じられません。私みたいなのが、創造神の生まれ変わりだなんて」

「そんなことないよ。君は間違いなくテレシアの生まれ変わりだ。僕ら四人がそう思うんだから間違いない。それに、君は彼女の遺物であるそのネックレスを所持出来る唯一の存在だ。それは普通の人間には扱えない代物なんだよ」

「普通の人がかけたらどうなるんですか？」

「首が吹っ飛ぶよ」
「ええっ」
「冗談だよ」
「心臓に悪いからやめてください……」
「けど、所持者以外を拒絶するのは本当さ。そのネックレスは僕らがテレシアのために作ったものなんだ。だから彼女以外が持つと拒絶される。人間達は天罰が下ると言っていたね」
「テレシアの死後そのネックレスはあちこちを転々とした。欲だましい人間に狙われ続け、過去には首にかけると死ぬネックレスとまで言われたこともある。だから精霊教会はそのネックレスを後生丁寧に祀ったんだ。エレンがそのネックレスを身につけていれば、少なくとも教会の人間達はエレンが正当な生まれ変わりであると認識するはずだ」
「そ……そんな曰く付きのネックレスだったんですね……」

「――――すまない。もう時間が来たようだ。エレン、我々は少しまたネックレスの中に籠る」
「えっ」
瞬間、四人の姿が前触れなく白んだかと思うとパッと霧のように消えた。今先ほどまでそこにいたのに。
「えっ……みんな、どこに……まさか、ネックレスの中に？」
『すまない。我々が具現化するためには力が必要なんだ。こうして君のそばにいるから心配しないでくれ』
ネックレスの中からヴァンの声がする。
「は、はい……分かりました」
――――そういえば、精霊って契約者がいないと姿を現すことが出来ないんだっけ……。

精霊選定を受けた人間達はその後その属性の精霊と契約する。そうして初めて力を振るうことができる。

精霊と人間は同じ世界で暮らしているが、次元が違うため契約しなければ目に見えない。その代わり、見えない裏で世界がこうして成り立つためにありとあらゆるものを助けている。

精霊と契約し力を引き出すためには、精霊との強い結びつきが必要だ。心を開き、信頼を得なければならない。

よく「精霊とは恋人や家族のように親密であれ」と教えられるが、それぐらいには仲良くならないといけないのだろう。

勿論、精霊と契約どころか話したこともない私にはまた理解できない話だが。

◇◇◇

予想通り、私の扱いは奇妙なことになった。
まず、部屋を奥に移された。教会本部はかなり広いが、司祭達はその中の最深部に大層立派な部屋を用意してくれた。勿論、お祈りの祭壇付きだ。
王族が暮らしそうな真っ白な家具が備え付けられた部屋はモリス家のカビ臭い部屋とは雲泥の差で、とても豪華だった。
「エレン様のお世話係は現在選定中ですのでもうしばらくお待ちを。ご不便をおかけいたします」
「い、いえ……お世話係だなんて、そんな。自分のことは自分で出来ますから……」
私のことを泥棒呼ばわりしていた司祭様はすっかりこの通り。
ここは教会の最奥だからそう人は来ないが、挨拶に来るのは教会でも位の高い司祭達ばかり。この首のネックレスがそうさせているのだろうか。
「普通などと。あなた様は創造神の生まれ変わりだと精霊王様がそう仰るのです。間違いありません。創造神が消滅されたお話は驚きましたが……我々は精霊王様に

従う所存です。どうぞ何なりと仰ってください」
「私は……これからどうしたらいいんでしょうか。司祭様もご存知だと思いますが、私は加護なしと言われてきました。こんなふうに大層な扱いを受けても何も……」
「それもアルマンド様に伺いました。現在エレン様はどなたともご契約されていないとのこと。でしたら精霊王様とご契約なさるのが良いかと」
「えっ……!?　でも、そんなこと……」
「アルマンド様曰く、水の精霊王様のご説明では、エレン様は創造神の生まれ変わりであるため、本来全ての素質を持っているそうでございます。ですので、精霊王様達と契約することが可能だそうで……」
精霊王と契約。この司祭、なんとなく言っているように聞こえるがとんでもないことだ。
そもそも、精霊は下級、中級、上級と三つに分類され、それぞれ契約者との結びつき度合いによって力を引き出すことが可能となる。

例えば水なら、下級では水の形状変化。これは攻撃や街の装置などに使用されている。中級では水質変化。主に港町などで、環境を整えるために使われる。そして上級では無から有を作り出す。水のない場所に水を作ることができるようになる。

多くの市民はほとんどが下級の精霊と契約している。母とリリアンも下級精霊と契約していた。そしてあれだけ加護なしを馬鹿にする父ですら、下級なのだ。

ほとんどの中級、そして上級精霊と契約したもの達は王宮や教会に務めることになる。その強力な力は世界を美しく保つために必要なものだからだ。

（カイル様、屋敷を湖にするとか言っていたけど……契約したら、私もそういう感じになるってこと？　しかも精霊王×4。とんでもないことだ。魔王になるわけじゃあるまいし、そんなに力があってもどうしようもない）

「そ……そうですか。少し、検討しますね……」

「そしてエレン様、不躾なお願いなのですが……先日式典が中断したことにより、市民達の間で不安の声が広がっております。そして貴族達の中でも、よからぬ噂が……我々

が誤ってあなた様を疑ってしまったことが原因ですが、彼らに説明を……いえ、ハッキリとあなた様の存在を公表したいと考えているのです」

「えっ、それは……」

頭の中で二つの考えが交差する。疑われなくなったことはラッキーだし、加護なしだと馬鹿にされていたから、今後はそんな声もなくなるかもしれない。

でも、公表されたらされたで噂の的になることは変わらない。今まで嫌われていた私に手のひら返してくる人たちがいることは分かりきっている。

精霊教会としてはきっと、私を公にすることで教会の地位が確固たるものになるから、その方がいいのだろう。

――――でも、断ったら？　ここ以外に居場所なんてない。家に帰ったところで、あの家族とうまくやっていけるとは思えない。

それなら……ここにいる方がいいかもしれない。少なくともここなら、害されることはない。

「分かりました……大丈夫です」
「ありがとうございます……！　ではそのように準備致します。あの、水の精霊王様は……？」
「あ……えっと、具現化するのはかなり力を使うらしくて、今はこの中に」
ネックレスに視線を向けると、司祭様はなるほど、と頷いた。
「精霊王様ともなれば、相当力を使うことでしょう。私も自身の精霊を具現化させると次の日は足腰が立たなくなるのです」
「そう……なんですね」
「現在はご自身のお力で具現化なさっているのでしょう。ですがそれも限界がありますから、お早くご契約なさった方がよろしいかと。水の精霊王様に再びお会いできることを楽しみにしております」
ペコリと頭を下げ、司祭様は下がった。
「四人に増えたんだけど、大丈夫かな……」

第二話　水の精霊王編～求めていたもの～

その一週間後のことだった。精霊教会は重大発表を行うとして、首都にある教会本部前の広場に人を集めた。

教会内外は朝から忙しなく、私がいる最深部にもざわつきが届くほどだ。今頃きっと司祭達が駆け回っていることだろう。

今日は先日のような祭典ではないから貴族や王族を招待しているわけではないらしいが、この話はおそらく精霊教会から国王へと伝えられているはずだ。

「……どうしよう。胃が痛くなってきたかも……」

貫った白銀の衣装に身を包んで迎えの人を待つ。心臓は破裂しそうなほど高鳴っていた。

『――――エレン、大丈夫ですか？』

「リヒタ……いえ。ちょっと、心配で……」

『大丈夫ですよ。教会側も馬鹿ではありません。あなたをひどく扱うことはないでしょう。もし仮にそうだとしても、我々がなんとかしますから。この行事はあなたを守るためでもあるのです。公にしてしまえば、誰もあなたを害せない』

長年……モリス家で、そして前世でひどい扱いを受けていたせいだろうか。人の親切を完全に信用できない。司祭達から悪意を感じたわけじゃない。ただ、私の心の問題だ。

今まで加護なしだと散々罵られてきた私が、創造神の生まれ変わりという立場になっているなんて、皮肉なものだ。

「エレン様、準備が整いました。移動をお願い致します」

扉の外から声がした。立ち上がって深呼吸をしたのに、やっぱり緊張は変わらない。

『エレン、俺達がついている』

フレイの力強い声に少し安心すると、ようやく足を踏み出した。

人が多いことは予想していたが、広場にはその想像を超える人々が集まっていた。精霊に関心がある国民達は、普段から教会の催しに足を運ぶ人が多いそうだ。それを考えれば当然の結果か。

（どうしよう、こんなに人が……）

緊張をほぐそうと深呼吸したものの、そもそも屋敷に引きこもって過ごしていた私が許容できる人数ではない。足がもつれて転んでしまいそうだ。

私が立つ場所は広場から少し高い場所。やぐらのようにステージが組まれていて、目線が高い分人にもみくちゃにされることはないが、その代わり視線が集中してしまう。当然、人々は現れた私に釘付けになっていた。

『ふふ、みんなエレンが可愛いから見とれているんだよ』

カイルは呑気に笑っている。そんな馬鹿な。というか、この状況で緊張しているのは私だけらしい。

位置について少しすると、最高司祭であるアルマンド様の話が始まった。

精霊教会はこの間の式典の収拾をつけるため、先日起きた事件をやや湾曲して伝えた。端折られたのは主に泥棒云々の話。なんだか釈然としないが、泥棒呼ばわりされたことを広められるのも嫌だから、もう構わなかった。

話が一通り終わるとアルマンド様が私の前に来て頭を下げた。

「エレン様、精霊王様からお言葉を頂戴することは可能でしょうか」

「え……？　え、えっと……」

『問題ない』

ヴァンの声が聞こえた。するとネックレスが光り、色違いの四つの光が空中を舞うと私の目の前に落ち着いた。四人の声がまるでスピーカーで喋っているように辺りに反響する。

『四大精霊の名をもってこの世のあらゆる生命に告ぐ。創造神テレシアは我々を……そしてこの世界を生み出すために大いなる力を使い、肉体を失った。しかしその大きな魂

は巡り再び肉体を形成した。それがこのエレンである。我々四名の精霊王は創造神の魂を持つエレンに従属し、その力を振るうこととする』

四つの光がブワッと眩い光を散らすと、それが花びらになって宙を舞った。

私が驚いていると人々は「精霊王さまが祝福なさっているのだ！」、「現人神さまがこの国に誕生なさったのだ！」と歓喜の声を上げた。

当の精霊王達は「俺達よくやっただろ？」と言わんばかりに私の周りをふよふよと飛び回っている。

（こんな演出されたらますます目立っちゃうじゃない……）

だが突然現れた「創造神の生まれ変わり」を疑う人はいなくて、少し安心した。仮にも加護なしだった私だ。信じてもらえないかもしれない……という一抹の不安はあった。

ひとまず、そんなこんなで公表は終わり、私はまた教会の最奥に引っ込んだのだった。

だけどひとまず慌ただしいイベントが終わりほっとしたのも束の間。教会預かりとなった私が引きこもってのんべんだらりとしているわけにもいかなかった。

この世界では教会の最高司祭ですらあくせく働いている。いくら精霊がいるといっても天災は起こるし、人的被害もまた多い。教会に勤める司祭達はそれらの処理があるため、優雅に暮らしているわけではなかった。

当然、創造神の生まれ変わりだと公表された私もまた、自堕落な生活をしているわけにはいかなかった。現人神エレンとして、各地から私を呼ぶ声が教会にいくつも届いた。

「――――そういうわけでエレン様。是非わたくし共と御同行していただきたく存じます」

各地からの報告書を持って小一時間ほど熱弁した司祭がようやく言葉を切った。

彼のいうことはもっともだ。いつまでも客人としてここに置いておくわけにもいかないのだろう。それに私もいつまでもタダで世話になるのは気が引ける。だけど――――。

（精霊の力が使えないのに、どうやってみんなを助ければいいの？）

あの公表をしたせいで、みんな私が四大精霊の力を使えると思っている。派手なパフォーマンスはかえって私の首を絞めていた。

単純に考えるなら彼らと契約すれば力を使えるはずだ。だけど精霊王だ。そんな簡単に出来るのだろうか。

そのことも含めて少し考えると一旦司祭に帰ってもらい、ネックレスに話し掛ける。

「あの、みんな……精霊と契約って、どうしたらいいんでしょう」

『契約する気になったのかい!?』

興奮したカイルの声が耳にわんわん響く。

「その……このままだと、私ただ飯ぐらいになっちゃうので。流石にまずいかなと……」

『エレン、君が契約するなら勿論僕は同意するよ』

『おい、カイル。お前また一人で俺らを出し抜こうとしてるだろ』

『そうですよ。エレンと契約したいのは我々もなのです。ここはエレンに決めていただきましょう』

『エレン、お前は一番初めに誰と契約したい？』

勝手に決められている気がするが、もう仕方ない。大袈裟な公表をしたから、どうせみんなと契約することになるのだろう。

こんな自分が精霊王と、しかも四人も契約できるなんて分からないが、みんながこう言うからきっと出来るに違いない。

「えと……、さっき、司祭様に領地の報告書を見せてもらったんです。南部の干ばつが酷いらしくて……。だからそれを優先的に対処したいから……」

『じゃあ、僕で決まりだね』
意気揚々としたカイルの声が聞こえると、他の三人のため息が聞こえた。
『カイルかよ』
『……仕方ありませんね』
「でもカイル、契約ってどうすればいいんですか。確か口頭でやるって教わったんですけど……」
『そうだね。普通の精霊はそれでいいよ。でも僕らは精霊王だから、もっと強い力を君に操ってもらわないといけない』
じゃあどうすればいいのか。何か道具でも必要なのだろうか。疑問符を浮かべると、カイルは『もう少しだけ時間が必要だと思うんだ』と意味ありげにいった。
「もう少し……？」
『精霊王との契約は普通の精霊以上に結びつきが親密でないといけない。僕はエレンに全幅の信頼を置いているけど、君はまだそうじゃないだろう？』

思わず口籠もる。指摘されていることは本当だ。カイルは私のことが大切かもしれないが、私はまだそこまで思えない。前世はそうじゃなかったかもしれないが、過去のことは覚えていないし、自覚もない。カイルには申し訳ないが……。

「……ごめんなさい」

『謝らなくていいよ。今の君にとって僕らは突然現れた精霊にすぎないから。だから君が少しでも僕らのことを信じてくれた時に契約しよう』

「カイル……」

カイルはいい精霊だと思う。でも、それを素直に信じることができないでいる。

親切には見返りが必要だ。それが分かっているから、カイルが私を求める意味が分からない。

(……ずっといらない子だって言われてきた私を、なんでそんなに大切にするのか、よく分からない。だからみんなに心を開けないの……?)

◇◇◇

御披露目式から数日も経たないある日のことだった。相変わらず教会の最奥に引っ込んでいた私の元に司祭様が訪れた。若い司祭は困ったような顔をしていた。

「あの、どうかしましたか……？」

「いえ……実は、エレン様のご両親の……モリス家の方々がいらしているのですが」

その言葉を聞いた瞬間身が強張るのが分かった。

本当は内心、分かっていた。カイルのおかげであの場を凌げたものの、あれ以来両親とは全くやりとりをしていない。突然縁を切ったような気分になってモヤモヤしていた。

「最高司祭様より、モリス家の方々はエレン様に近付けてはならないとご命令を受けておりますが……エレン様にとってはご家族にあたりますため、一応ご報告させて頂きました」

「あの……それで、両親は……」
「教会の祈り場でお待ちになっております。エレン様に会うまで帰らないと仰っていて、どうしたものかと……生憎最高司祭様もご不在で……」
（どうしよう。なんで会いにきたの……？　もしかして、謝りたいとか……）
名前を聞いただけなのに心臓がバクバク音を立てる。頭の中が真っ白になって、どうしたらいいか分からない。
『そんなもの、断った方がいい』
声を発したのはカイルだ。
『彼らは君に暴力を振るったんだ。しかもそれだけじゃない。長い間蔑ろにして、君の自尊心を傷つけた。会う必要なんてないよ』
声だけでも分かるぐらいカイルは憤慨している。実際、両親から私を助けてくれたのはカイルだ。いい感情を抱いていないのだろう。

『ですがカイル、それでも彼らはエレンの家族。我々が勝手に決めていいことではありません。大事なのはエレンの選択です』

『エレン、お前はどうしたい』

「私は……」

正直、会いたくはない。彼らは血のつながりはあるが、「家族」ではなかった。私が加護なしだと分かった途端、彼らの中で私は最も底辺の人間になった。その程度のものなのだ。

そんなふうにコロコロ気分が変わる人は信じることは出来ない。いっそ、ずっと憎んでいてくれた方が良い。

だけど心のどこかで、まだ和解出来るかもしれないと思っている自分がいる。今までのことを水に流して仲良くなれたら。私がみんなと同じだったら築けていたかもしれないものが手に入るかも……。

「……少しだけ会ってみます。何か用事があるのかもしれませんし」

『エレン！』

「大丈夫。ここは精霊教会ですし……流石にこの前みたいなことにはならないと思います」

この間は興奮して、気が立っていただけだ。あのネックレスは私のせいじゃないと分かったわけだし、父もあんなふうに激昂することはないだろう。母も私がただの加護なしでないと知って安心したのだと思う。リリアンは――――来ているのだろうか。

ゆっくりとした足取りで祈り場へと向かう。祈り場は一般の参拝者達が入れる部屋で、教会敷地内に幾つかある。中には一人で静かに祈りを捧げたいという参拝者もいるため、貸切で貸し出すこともあった。

ノロノロ歩いたつもりなのに、いつの間にか祈り場に着いてしまっていた。目の前にある扉がやけに怖い。扉を開けるのをしばし躊躇ったが、意を決してノッカーを引っ張った。

ギギ……と蝶番が鈍い音を立てる。真っ白な祈り場の奥に人影が二つ。父と母だ。どうやら、リリアンは来ていなかったらしい。

「ああ、エレン……っようやく会えたわね！」

私の姿を見るや否や、母が顔を上げて急足で近付いてくる。そのまま私をギュッと抱きしめると、懐かしそうに笑顔を向けた。

「心配していたのよ……！　あなたが屋敷から連れて行かれて、連絡もないし、そうしたら突然あなたが創造神の生まれ変わりだって聞いて……」

「あ……ごめん、なさい」

なぜか咄嗟に謝ってしまった。いつもの癖だろうか。心配してくれている母に申し訳ないという気持ちが少し浮かんだ。

「今までごめんなさいね……でもあなたのためだったのよ。あなたも知っているでしょう？　この国はみんな精霊の加護を受けている。でもあなた一人だけ加護なしだなんて……あなたが好奇の目に晒されるのが辛かったの」

「そうだぞ、エレン。そもそもお前が創造神の生まれ変わりだと知っていたら、わざわざ屋敷に隠しておくこともなかったんだ」

「そうよ、エレン。あなたがそんな素晴らしい才能の持ち主だったなんて……あれから色々な人にエレンのことを尋ねられるの。私とっても鼻が高いわ」

両親はこの間の剣幕、騒動が嘘だったかのように笑顔だった。私が加護なしだと分かる前、まだ私に笑いかけてくれていた頃の――――。

（どうしてなんだろう。二人とも、私に会えて喜んでくれてるのに……全然、嬉しくない……）

両親はあのお披露目式に来ていたのだろうか。どちらにしろ、かなり派手な式だったし創造神の生まれ変わりが現れたのなら新聞にも載っているはずだ。

自分の子供が創造神の生まれ変わりだなんて、誇らしいに違いない。実際、彼らはそんな顔をしている。

――――じゃあ、どうしてあんな暗い部屋に私を閉じ込めたの？

――――どうしてリリアンと一緒に外に連れて行ってくれなかったの？
――――どうして私だけ見窄らしい服を着せたの？
――――どうして私だけご飯が違うの？
――――どうして私を冷たい目で見るの？
――――私のことが大事なら、なんであの時……味方になってくれなかったの？
心の中に次々と疑問が湧く。表情は死んでいても涙は出そうで、思わず我慢した。
「お父様、お母様……リリアンは……どうしているんですか」
「リリアンのことはいいのよ。あの子はへそ曲がりだから、ついてこなかったの。我儘ばかりで本当困った子だわ」
「それより、エレン。水の精霊王様はどちらにいらっしゃるんだ？」
「え……？」
「この間は誤解されただろう。お前から一言謝っておいてくれないか。我々はお前を疑いたくて疑ったわけではないのだ」

「それは……」
「そうよ、エレン。お父様はあなたのことを心配していたの。だから悪気があったわけじゃないのよ。だから、ね？　精霊王様にきちんと説明しておかないと」
（この人達は……何を言ってるの？）
言葉にならないものが込み上げてきて気分をひどく落ち込ませる。耳鳴りが鼓膜に響いて頭が痛い。二人の声がぼんやり消えていく。
ああ……そうか。この人達は最初からそれがしたかっただけだったんだ。精霊王の怒りを買ったままが嫌だから、私を通じて怒りを鎮めたかった。私に言えば精霊王もいうことを聞くだろうって、そういうこと。
何を馬鹿な期待をしていたんだろう。やっぱりこの人達は自分が大事なだけで、別に私の心配なんかしていない。保身でここに来ただけだ。
私が創造神の生まれ変わりだって聞いて焦ったんだろうか。今までの態度も全部帳消しにして欲しいと思ったんだろうか。家族ならいうこと聞いてくれるだろうって？

なんて都合がいいんだろう。
「あ……っエレン！　どこへ行くの！」
走った。とにかく走った。嫌なものは聞きたくないし、悪いものは見たくない。
隠れるように自分の部屋に戻ってベッドの上に倒れ込む。
（結局……私の価値なんて、あの人たちにとってはそんなものだったんだ。創造神とか精霊王とか、そういうものが基準で決まるんだ）
じわじわ涙が滲んでシーツが冷たくなっていく。今更、馬鹿みたいに会いに行ったことを後悔した。
『エレン……』
ネックレスの内側から声が聞こえた。カイルの声だ。
『エレン、君は――――』
「あっちへ行って！　放っておいて！」

カイルだってどうせ、創造神の生まれ変わりじゃなかったらこんなふうに大事にしてくれなかったくせに。私がただのエレンだったら、どうでも良かったくせに。

八つ当たりだと分かっている。でも今は辛いことが山積みになって処理しきれない。

馬鹿にされなくなったのだからそれでいいと割り切ればいいのに出来ない。今までのことを忘れて両親と仲良くすればいいのに出来ない。

相手を許せば今の辛い気持ちもなくなるかもしれないけど、そんなに人間出来てない。嫌なことはいつまでも頭から離れないし簡単にも許せない。

「行かないよ、エレン。そばにいる」

背中に何かが当たる感触がした。カイルの手だ。自分がみっともなくてまた涙が溢れてくる。

仲良くしたかっただけなのに、どうして前世でも今世でもうまくいかないんだろう。

「カイルだって……あの人達と同じじゃないですか……っ私が、創造神の生まれ変わりだから大事にするだけで……そうじゃなかったらみんなみたいに疎むんでしょう！　私なんてどうせ誰からも必要とされない……っ価値がない加護なしなんだから！」

こんなふうに愚痴を言ったのは初めてだった。今まで誰にどんな扱いをされても言い返すことはなかった。

だって、言ったところで誰も聞いてくれない。言ったところで自分が惨めになるだけだ。

仲良くしたいだけだったのに。

「エレン、それは違うよ。僕等がテレシアを大切にしていることは事実だけど、だから生まれ変わりの君を大事にするっていうのは少し違う」

どう違うのか。僅かにカイルの方に視線を向けたものの、うつ伏せになっているから彼の顔は見えない。

「僕等精霊王はね、テレシアからお願いされたんだ。この美しい世界を守るようにって。テレシアはこの世界が好きだった。どの生き物も平等だったし、大切にしようとしていた。だから僕等はこの世界を守ってきた。それが彼女の願いだから」

ほらやっぱり。創造神が大事だから、私のことを守っただけ。心の中で返事しながらも声には出さない。

「大切な人が大切にしているものは、僕も大切なんだ。君の両親みたいに癪に触る人間がいることも事実だけど、僕は基本的に生き物はみんな大切だ。この世界は綺麗だなって思ってる。だから、君に世界は薄汚くて誰も信じられない、怖いものばかりだって思ってほしくない」

カイルのいうことはよく分からなかった。この世界のどこが綺麗なのか。私にとっては醜いもので溢れた世界だ。とっとと死ねたらいいのにと思うぐらい。

「創造神がとか、精霊がとか……それはとても小さな基準だ。少なくとも、僕ら精霊王にとっては」

「……じゃあ、どうして……私を助けたの」
「簡単だよ。エレンっていう存在を愛してるからさ」
カイルの話はよく分からない。精霊だからなのか、人間とは違う。
けれどなぜか安心した。どういう意味かも分からないのに、涙が止まらなくなった。
「う……うぅ……っ」
「泣いてもいいんだよ、エレン。感情を殺しちゃダメだ。この世には君が綺麗と思えるものがたくさんある。今いる場所が嫌になったらそれを探しに行けばいいだけだ。僕が君の行きたいところに連れて行ってあげる」
ようやく私は顔を上げた。カイルの方を見ようとしたところで、ギョッと驚く。そこにいたのはカイルだけじゃなかったからだ。
「みんな……」
「そうですよ、エレン。今まで君は小さなカゴの中にいただけです。世の中にはもっといろんな人間がいるんですよ」

「お前が悪いわけじゃねえんだ。だからそんなに泣くなよ。なっ？　ほら、俺らがいるじゃねえか」
「お前はお前だ。だからテレシアと比較する必要はない。生まれ変わりだからといってお前の価値が上がったり下がったりすることはない。もっと自分に自信を持て」
「おい、ヴァン。もっと言い方ってもんがあるだろ」
「フレイ、お前も人のことが言えるのか。そのような安っぽい慰め方でエレンの傷が癒えるとでも？」
「なんだとこのぼっち野郎が」
「うるさい瞬間湯沸かし器」
「こらこら二人とも、こんな時に喧嘩はやめなさい」
「そうだよみっともない。君たちのことなんかどうでもいいよ。今はエレンの話を――――エレン？」
（私……そっか。今まですごく、寂しかったんだ）

前世でも今世でも、誰かと深く繋がりたかった。だけどずっとそれが出来なくて辛かった。本当は誰かに心を開きたかったのに。

「……ありがとう、みんな」

◇◇◇

結局それ以降、両親が私を訪ねてくることはなかった。もしかしたらカイル達が司祭様に何か言ったのかもしれないが、もうどちらでもいい。それよりも私はやらなければならないことがあった。

再度司祭様から打診されて、いよいよ南部に行かなければならなくなったからだ。

とはいえ、私とカイルはまだ契約していない。カイル曰く、もう少しかかると言っていたが――――。

「あの、カイル……契約のことですけど」

『ああ、そうだね。しよっか。契約』
「え？　いいんですか」
『……そろそろ、僕と君の絆も深まったと思うから。今夜にでも教えてあげるよ』
「今夜？」
『僕と君の契約だからね。僕もそれなりにムードってものを大事にしたいから』
『なに言ってんだこの破廉恥野郎が』
『エレン、嫌だと思ったらすぐに逃げるんですよ』
「は、はぁ……」
結局カイルの説明では一つも理解できなかった。とりあえずあとはカイルに任せていればなんとかなるだろう。
そうこうしてるうちに夜が来てしまい、食事も何もかもが済んでから、私はカイルに話しかけた。
「あの……カイル。夜が来ちゃいましたけど……」

『ああ、じゃあネックレスを外して貰えるかな』
「え？　いいんですか？」
『じろじろ見られながらするのは好きじゃなくてね』
言われた通りネックレスを外す。するとネックレスが青白い光を帯びてぱあっと光ったかと思うと、カイルが姿を現した。
久しぶりに見たカイルはやっぱり美しい。人間とほとんど姿が変わらないのに神秘的で、どこか近寄りがたい雰囲気を放っている。神様と言われても頷いてしまいそうだ。
「え？　カイル……具現化するのは力を使うんじゃ……？」
『うん。でも必要なことだから。さて……じゃあ、そのネックレスは一旦仕舞っちゃおうか』
カイルが指を振ると、ネックレスがふわりと浮く。部屋に備え付けで置かれていた綺麗な木箱の中に飛んでいくと、ガチャリと蓋が閉まった。
「カイル？」

『エレン、君は精霊との契約についてどこまで知ってる？』

真面目な表情で尋ねられたので、慌てて居住まいを正した。

「えっと……確か、人間が呼びかけると、その中でも一番相性がいい精霊が反応するって……。それでお互い同意すれば、契約の言葉を交わす……って、習ったと思います」

習ったといっても、私が精霊選定を受ける前の記憶だからもうかなり前のことだ。方法は今も変わっていないと思うが、長年精霊のことを学ぶこともできなかったから、私の知識は信用できない。

『その通りだよ。精霊は人間に呼ばれたら一番相性がいいと思うものが名乗りを上げる。精霊は人間と協力して世界を作ることが義務付けられているからね。そして契約は口頭で十分だ。下級精霊は持っている力も限られるからそれで事足りる。ただし、中級精霊や上級精霊はそれだけでは難しいから、人間との結びつきが非常に重要になってくる。そして、僕らの場合も同じだね』

「じゃあ……カイルと契約するのは難しいんでしょうか」

『そんなことはないよ。僕の心は君に常にフルオープンだからね。普通の口頭契約だけでも十分な力を授けられるだろう。だけど、力は常に対価が必要なのさ』

「対価？」

『精霊王っていうのはね、面倒な生き物なんだ。僕らが意識だけで漂っていたのは君を待つためでもあるけど、契約するに相応しい大きな器がなかったからさ。元々テレシアの力を四つに分けたとはいえ、彼女の力はとても強大だ。契約相手を見つけることは不可能なんだよ。君以外はね』

「じゃあ……私となら契約できるんですね」

『そう。君が肉体と心を捧げることで僕の力は君に共有される』

「……肉、体？」

思いもよらない言葉を聞いた直後。カイルの体がさっきよりも私に近づいたと思ったら唐突に唇を塞がれた。

「んん……っ！」

何がなんだかわからないでいる間にカイルの唇はすぐに離れた。悪戯っぽく笑みを浮かべると、穏やかな口調が私を宥める。

「こういうこと」

「え……っ、え、あの……今何を……っ」

「強い力を引き出すためには精霊と人間の結びつきが重要になる。だからお互いの信頼を示すためには言葉だけじゃ足りないんだ」

意味深な笑みを浮かべるカイルに私は唖然としたまま頭の中でぐるぐる考える。もしかして、肉体を捧げるというのは早い話が……男女のアレをするということなのだろうか。

「……そう、ですか」

「あれ？　思ったより驚かないね」

「タダで貰えるものなんてありませんから……」

この世界の私はともかくとして、前世の私は両親のネグレクトで暮らすにも食うにも困っていた。だから体を売ったこともある。

私は体を売る見返りとして食事やお金、寝る場所を貰った。あまり褒められた話ではないが、ギブアンドテイクというやつだ。そこまで汚れてないとはいえ、カイルもそういうことを要求しているのだろう。

（簡単に契約出来るわけがないよね。仮にも精霊王だし……体ぐらいで済むなら、安いのかも）

「私は別に構わないから、カイルの好きなように進めてください」

「……やけに淡白だね。僕とするの、まるで興味ないみたいだ」

流石にあっさりしすぎたのか、カイルは不満そうだ。

別にカイルに興味がないわけじゃない。カイルは格好いいし、普通に考えればこんな美男子とセックスできるのはかなりラッキーだ。でも私はセックスに特別期待なんてしたことがない。

「……カイルが悪いわけじゃないんです。そういうことするのに、いい思い出がないだけで……」

「エレン、おいで」

カイルは不機嫌な表情を解いて私をベッドに誘った。カイルに誘われるままベッドに膝をつくと、彼は私を優しく抱きしめてくれた。

「エレン……君の前世は辛いことがたくさんあったんだね」

少し、拍子抜けした。カイルは私の過去を知っている。だからきっと、私が前世でした人に言えないようなことも見ているはずだ。

それが穢らわしい行いであることはよく分かっているし、褒められるとは思っていない。創造神の生まれ変わりには到底相応しくないとがっかりされてもおかしくないのに。

「ごめんよ……僕がその世界にいれば、君にそんなことをさせたりしなかったのに。僕らが生まれてきたせいで君は辛い目に遭ってばかりで……」

カイルはぎゅっと私を抱きしめるとなんだか泣きそうな声を溢した。綺麗な瞳が潤むのを見ると、思わずギョッとしてしまう。

「な……ど、どうしてカイルが謝るんですか。別にカイルは関係ないのに……」

「みんなに愛されるべき君が知らない世界で苦労していたかと思うと……僕なんて生まればければ良かったんだ……」

「そ、そんなことありませんから。カイルがいたおかげでみんなすごく助かってますし、私もカイルに助けてもらいましたし……っ」

「そうかな……」

私が慰めると、ようやくカイルは悲しそうな顔を上げた。

（水の精霊がナイーブって話、本当だったんだ……）

水の精霊は周囲の影響を色濃く受けるため、繊細な性格の精霊が多いと習った。どうやら、カイルもそれらしい。思えば、フレイもそうだがカイルが一番感情表現豊かなような気がする。特に、私のこととなると見境がない。

「昔の私が何を考えてたのかはわからないですけど……きっとカイルに会いたいって思ったからカイルを作り出したんだと思います。カイルがいたら、この世界がもっと素敵になるって……」

「……テレシアもそう言っていたよ。あなたは必要な存在なのよ、って……」

その言葉をそっくり返すように、カイルはもう一度私をぎゅっと抱きしめた。

「エレン……僕はね、ただ等価交換がしたいわけじゃないんだ。結びつきっていうのは、君と僕の間に強い感情が生まれなきゃいけないんだよ。肉体を捧げるっていうのはその手段にすぎない。だから、そんなふうに投げやりに考えないで欲しいんだ」

「じゃあ……私はどうすれば……？」

「欲を言えば、僕を好きになって欲しい。ああ、好きっていうのは家族とか、仲間って意味じゃないよ。存在として最高のって意味。僕は君のことが好きだ。それこそ生まれた時から、本当はずっと君とこういうことがしたかった」

「えっ……、あと、その……」

カイルが私のことが好きだってことはよく知っている。出会ってまだ少ししか経っていないとはいえ、カイルの愛情表現は精霊王たちの中でも一際群を抜いていたから。

だけどいざこうして真正面から言われてしまうとなんだか照れてしまう。告白なんてされたことがないし、カイルは前世で言えばアイドルばりの綺麗な顔立ち。さっきまでしていた肉体関係の話のほうがよほど恥ずかしいのにどうしてだろう。

「いきなり好きになれとは言わないよ。僕も、タダで君の愛情が手に入るとは思ってないからね。けど、そのための努力ぐらいはさせて欲しいんだ。過去の嫌な思い出なんて忘れるぐらい、僕が気持ちよくしてあげるから……」

カイルはまた微笑むと今度はゆっくりと口付けた。細い腕で抱きしめながら、柔らかい唇が往復する。

前世ではキス以上の行為を何度となくした私だけど、キスはあまりしたことがなかった。お金と引き換えに男性が要求するのは私の肉体と自分の快楽だけだったから、キスなんて微妙な行為は求められた記憶がない。

そもそもセックスは愛情の上にある行為ですらなかった。したとしても好意を抱いた相手じゃないから、きっと不愉快なだけだ。だからしなくても構わなかったし、さっさと出すもの出してお金をもらう方が楽だった。

（なんでだろう。カイルのことは別に好きとかじゃないのに……変な気分）

あれだけ好意をアピールしていた割にカイルはとても紳士的だ。焦っている感じもなければ、それ以上を求めている感じもない。ゆっくり触れられると、変に考える余裕が生まれてしまう。

ちゅ……とリップ音を立ててカイルの顔が少し離れた。私はきっと今、とても気まずい表情を浮かべている。なのにカイルの方はなんだか余裕たっぷりだ。

「僕はね、ずぅっと君に触れたかった。でも君は創造神だ。特別誰かを贔屓には出来ない……だから、今君を独占できてとっても幸せだよ」

体がゆっくりとベッドに押し倒される。カイルは細い体を私にくっつけながら、さっきみたいに優しく口付けた。頬を撫でる指先がなんだかくすぐったい。初めての感覚に、また変な気持ちになってしまう。

「エレン……少し、口を開けて」

至近距離で囁かれるとゾクゾクする。私はその通り唇を動かした。カイルの唇から柔らかい舌がにゅっと伸びて、口内に挿しこまれる。そのまま中でクチュクチュと動かされると、カイルに触れられた場所が熱を持ち始めた。

「ん……ふぅっ……んん、は、ぁ……」

「っは……可愛い……エレン、上手だよ」

カイルの指が頬から首筋へと移る。あまり触られたことがない場所だからか、ついびくっと反応してしまった。精霊は人間とは違うのにちゃんと体温がある……なんてぼんやり考えていると、私の上で彼が拗ねたような顔をした。

「エレン、よそ見しないで。それとも、もっと激しくした方がいい？」

「そんなんじゃ……ひゃっ」
唐突に服の上から手のひらが胸の膨らみをまさぐった。ようやく、私の頭がこれからする行為がただの等価交換でないと思い知る。
「ダメだよ……エレンはちゃんと気持ちよくならないと。僕のこともっと好きになって……自分から求めるぐらい感じて」
悪戯っぽい笑みが近づいて来る。カイルの唇は再び私に触れるとさっきみたいに舌を中に入れて掻き回した。
あったかくてぬるぬるしてるものが、私を味わうみたく延々と中で這い回る。カイルは綺麗な顔で舌を突き出して、わざとたくさん音を立てているみたいだった。
ディープキスなんて初めてだ。だけどその心地よさときたら、既に今まで体感したものの全てを上回っていた。しかもカイルは口付けながら器用に胸のふくらみを撫でて刺激してくる。
「ぁ……んむ♥んっ、ちゅく♥ぁ……っ♥♥んっ♥ふ、ぁ……♥♥」